

セントルイス万国博覧会と日露戦争

－異文化交流の視点から－

The World Fair in St. Louis and the Russo-Japanese War

－ Focusing on Cultural Exchange －

楠元町子 (Kusumoto, Machiko)

Japan took part in the World Fair (1904) in St. Louis during the Russo-Japanese war.

Culture Exchanges during the World Fair in St. Louis gave America a better understanding of Japan. It was the main purpose of Japan. America mediated between Japan and Russia to help to end the Russo-Japanese war through the treaty of Portsmouth.

1. はじめに

1851年ロンドンで、世界最初の万国博覧会開催以来、万国博覧会は、その時代の文化・文明・国際関係など時代のすべてを反映する性質をもつ催しであった。そのため19世紀末から20世紀にかけてのいわゆる帝国主義時代に開催された万国博覧会は、開催国及び参加国の植民地政策を濃厚に反映しその開発と発展に貢献しようとする政治的側面があった。万国博覧会はその巨大な規模と国際的な参加と莫大な数の人々が集まることによって、他に類例をみない庶民レベルでの世界認識の場、異文化交流の場となった。

1904(明治37)年に開催されたセントルイス万国博覧会において、米国は帝国主義政策に基づき、社会進化論と人種差別主義を背景にした悪名高い「人間の展示」¹を大規模に展開した。一方日清戦争の勝利以降、急激にアジアに進出してきた日本を脅威と見る黄禍論が、米国内で再熱しつつあった。このような中、日露戦争を開戦した日本は、日本に対する誤解と不信を解き、米国に対日友好世論を形成するためセントルイス万博に参加した。日本はセントルイス万博での日本の展示や外交官、皇族を中心とした広報活動により近代的西洋に連なる国というイメージをアピールした。それを米国がどのように受容し、どのような効果を生じたであろうか。

万博に関する主なる研究としては、博覧会を国際政治との関連から論じた吉見²の著書や、万博を世界に対する日本イメージの創出の場として捉えた園田³、佐野⁴の研究、米国開催の万博での日本の評価変遷について論じたNeil Harris⁵の論文、セントルイス万博を対象に日本のイメージ形成をナショナリズムの面から研究した畑⁶の論稿があるが、日露戦争との直接的関係を論じたものはほとんどない。これらの成果を踏まえ、本稿では日本国政府のセントルイス万博の史料、日本の新聞記事、セントルイス公立図書館所蔵史料等の分析を通じて、日露戦争においてセントルイス万博がどのような役割を果たしたのか分析を試みたい。

2. セントルイス万国博覧会

(1) セントルイス万博の開催経緯と概観

セントルイス万博は、米国が1803年にフランス皇帝ナポレオン一世からルイジアナ州を購入してから百年経過したことを記念して、1904（明治37）年4月30日から12月30日にかけてミズリー州セントルイスで開催された。ルイジアナ地方の購買は、当時13州であった米国の領土を2倍に増大させ、やがてロッキー山脈を越えて西部諸州への発展の端緒となった。ゆえに米国の史家は、ルイジアナ地方の購買をアメリカ合衆国独立宣言以来の一大事件としている。米国がフランスから購入した地域は、その後二十三州の繁栄した地域となり、セントルイスはその地方最大都市であった。⁷

博覧会の開設に関しては、1889（明治22）年の頃からセントルイス市民の一部から開催の要望が起り、1898（明治31）年に開催に向けて新聞雑誌・地方有力団体・州議会等の決議建議等が行われ、開設運動が本格的に開始した。1901（明治34）年4月にミズリー州法に従い博覧会会社が成立し、資本総額はルイジアナ購買に要した費用と同額の1500万ドルとし、合衆国政府・セントルイス市・博覧会会社がそれぞれ500万ドル負担した。1904（明治37）年6月に会場の敷地を決定し、8月にアメリカ大統領マッキンレーが世界各国に参同の招請を發した。セントルイス万博は、当初1903（明治37）年に開催が予定されていたが、会場の建築など準備が整わないことや、諸外国の参加が少なかったことから、開催は1904年に延期された。しかし百年記念に対して一か年齟齬を生じるため、1903（明治36）年4月30日に会場落成式を挙げて形式を整えた。

会場の敷地面積1240エーカーは、1893（明治26）年シカゴ万博（633エーカー）の2倍、1900（明治33）年パリ万博（336エーカー）の4倍で、あまりに広大な会場面積のため、また熱さのため観客のなかには倒れる者が続出し、展示用として出展されていた救急自動車が大活躍し、自動車の実用性を証明することとなった。その後、救急自動車は世界の都市に普及した。会場は毎日午前8時に開場し、陳列館も同時に開館し日没前閉館、興行物飲食店は午後11時まで営業した。会場内館外の地域は午後11時まで開放し、日没後は色とりどりのイルミネーションが輝き、パビリオンをライトアップし、「電気の世紀」の開幕を告げるのにふさわしかった。

参同国は1900（明治33）年パリ万博37カ国、1893（明治26）年シカゴ万博43カ国を凌ぐ44カ国を数え、国内では47州3都市が参加した。開会日数185日間の総入場者数は19,694,855人（うち無料入場者数6,890,239人）、入場料は成人が50セント、小中学校生徒その他の児童が25セントであった。無料入場者が多いことは問題となり、しばしば政府からは正勧告が出されたようだ。⁸ 収入は約1029万ドル、支出は2452万ドルとなり、経営的には大失敗の万博となったが、自動車、航空技術、無線電信の三つの近代科学をはでにデモンストレーションし、自動交換式電話やテレプリンターの登場など来るべき米国の高度機械化時代を予告する博覧会となった。⁹ また、国際会議は万国学術会議・新聞記者会議・空中飛行会議などが20、国内会議は46開かれ、文化学術においても多くの成果が見られた博覧会であった。

セントルイス万博では、「博覧会開設の趣旨は人類の知識啓蒙にあり」と、出品部類目録の筆頭に「教育に関する物品」をおくだけでなく、はじめて教育館を設置した。¹⁰ セントルイス万博で特に注目されたのが、娯楽街「PIKE」、人類学部門、「フィリピン村」の三ヵ所で、これまでの万博を上回る規模で展開された悪名高い「人間の展示」であった。

(2) 米国の帝国主義的展示

19世紀後半から20世紀初頭の米国は、ダーウィニズムの影響が圧倒的だった国で、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の社会進化論は本国の英国より米国での評判がはるかに高かった。¹¹ 「環境に適応したものは生存し、そうでないものは死滅する」というというダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) の称えた「自然淘汰」の思想は社会進化論に應用され、社会においても競争の結果適者が勝てば、それだけ社会が進歩するのだという説が広まった。社会進化論は、自分たちは普遍的文明を世界に流布しているのだという欧米人の「人道主義的使命感」に結びつき、植民地支配を正当化する根拠となった。¹² それは、セントルイス万博の米国の展示物であるインディアンスクール (亜米利加印度人学校) やフィリピン諸島の出品に如実に現れている。

米国政府は、「人類学部門の展示」のため様々な部族の米国インディアンを多数博覧会に連れてきて、彼らの風俗習慣をそのままに広い空地にテントを張って住ませ、来館者に見学させた。¹³ この空地の高い所に一大洋館を建て、インディアンスクールと呼んだ。建物の中央に広い廊下を設けて、右方に教育を受けた「インディアン」、左方に無教育の「インディアン」とし、第一室は食堂、第二室は台所、第三室は裁縫所、第四室は大工鍛冶工、第五室は印刷所に区別し総て文明的と野蛮のとその室を相対し右と左とを比較させた。左方には顔に色油を塗り怪しげな衣服を着け野蛮人の姿であるが、右方は男女とも洋服を着て総て文明的であった。この文明化した「インディアン」は、米国政府が建設した“Model Indian school”で学び、自分達の独自の文化が変容した成果を示すために、米国各地から連れてこられた。西洋の教育を受け成功した例として、「インディアン」の女子バスケットボールのチームによる試合も行なわれた。¹⁴

この試合を見学した日本の記者は、感想を次のように記した。¹⁵ 「16、7歳の女生徒のバスケットボールを試みるのを見たが、中々活発で蕃人の女子とは見えず、正確で巧みな英語を話した。幾十年か経てば、彼らの子孫は立派な国民となるであろう。聞くところによれば黒人と同様能力はにぶく白人と同じにはならないらしい。しかし、インディアンと白人との間に生まれた男女の能力は異なるようだ。」教育によって未開人を文明化することは可能であるが、人種的能力差まで是正することはできず、白人、白人と「インディアン」との混血、「インディアン」という人種的配列順位は不動であった。

セントルイス万博は、米国が1899年の米西戦争の勝利によりフィリピンとハワイを併合し、世界に海外に植民地をもつ「帝国」へと大きく変貌していった時期に開催された。米国の帝国としての象徴が、万博での広大な「フィリピン村」の展示であった。広さ47エーカーの敷地には、商業館、山林館、人類学館、織物館、教育館、農業館、武器館、兵営、マニラ土人部、

フィリピン模型大地図等が建設され、あたかもフィリピン群島大博覧会のようなものであった。「フィリピン村」には、全体で1200人にも及ぶフィリピン諸島の諸部族の人々が集められていた。1889年パリ万博以来、植民地住民の集落展示は欧米の多くの博覧会で行われていたが、この「フィリピン村」ほど大量の人々が一つの植民地から集められた例はなかった。フィリピン諸部族は、最も文明化されていない部族としてネグリト族とイルゴット族を、やや文明化された部族としてバゴボ族とモロ族を、比較的よく文明化された文化部族としてヴィサヤン族、と進化論的に階層化された仕方でも展示されていた。¹⁶さらに観客は、米国仕官の下に訓練を経て「文明化された」フィリピン人である警察兵を展覧できた。未開部族から米国によって文明化されたフィリピン人までを見学した人々は、米国によるフィリピン統治の正当性を確認させられたのである。

この「展示されたフィリピン人」を、同じ東洋人である日本人はどのようにみていたのであろうか。1904(明治37)年10月11日付け朝日新聞は、次のように報告している。「さすが米国統治の下にあるため教育館に陳列してある小学校生徒の製作品、中学校程度の男女両生徒の製作品には文明国と同じ物があり、特に美術学校生徒の作品には見るべき絵画が多かった。」米国の教育効果は認めているが、25セントの入場料を払って入る「彼らの生活をそのまま再現した」マニラ土人部については、「中では奇妙な銅鑼のようなものを叩いて数十人で円陣を造って踊りまわる所があるが、見るに耐えない。25セントは高い。」と批判している。フィリピン兵士について、「兵営には二個中隊がいるが、兵士は全くのフィリピン人で服装その他は米国流であるが、薄黒き小身なる兵士が列をなして境内を行進する所は恰も日本人のよう」であり、彼らが見世物的に日々两三回境内を練歩く姿を見て、「兵士としても憐れなると聊か同情の念」に堪えないと記している。

人類学館での「インディアン」や「フィリピン村」の展示は、異質な文化への理解を促すよりも、アメリカ人の非白人世界に対する「優越性」を「実物」によって再確認させる役割を果たしていた。

(3) 日本の参加経緯

日本政府に対しての参加要請は、1901(明治34)年8月に米国駐在高平公使(1854-1929)を通して行われ、さらに同年10月に日本駐在アメリカ合衆国特命全権公使が、日本の外務大臣に参同出品並びに代表者の派遣を要請してきた。日本政府は、参加準備の時間が足りないこと、1903(明治36)年大阪で第5回内国勲業博覧会を開催するため、政府として参加せず、民間の商工業者に出品団体を組織させ国庫より補助金を支給して出品することにした。

日本の民間業者の出品意欲は高く、*WORLD'S FAIR BULLETIN*の1902(明治35)年3月に外国人として初めて横浜の絹貿易商の菅川清がセントルイス万博に参加を申し込んだという記事が掲載されている。菅川氏は、参加申し込みの手紙にセントルイス万博のために作成したバッチ(記章)を同封し、博覧会に出品する意欲を示していた。¹⁷セントルイス万博は、諸外国の参同準備が整わないため、開催が1904(明治37)年に延期された。米国政府は、日本政

府が参同しないことも延期の一理由とし、もし日本政府が参加すれば博覧会の各種の便宜を与え政府館建設地および展示館の陳列地区等最良の場所を提供するとし、再度政府として博覧会に参同することを日本政府に要請した。¹⁸ 日本政府は、手島精一の強い勧め¹⁹ もあり政府としての参加に踏み切り、1902（明治 35）年 10 月に閣議を経て公式参加を決定した。1903（明治 36）年 7 月には臨時博覧会事務局を設置し、同月事務局長手島精一は陳列場準備打合せのため渡米した。

日本政府館の敷地交付式は、1903（明治 36）年 11 月 3 日の午後、明治天皇の 50 歳の誕生記念日に挙行された。多くの日本の市民も含めおよそ 500 人の紳士淑女が出席し、博覧会総裁フランスが式辞²⁰ を述べ、日本の迅速な参加表明に対して感謝の意を表明した。「ヨーロッパの大国のほとんどが、参加の意思を示さなかった時、日本は私たちの勧誘を受け入れてくれた。日本の好意的な返事は、私たちに自信を与えた。日本が望んだ最良の場所を私達が提供したことが分かるだろう。」続いて、手島精一が、次のように答辞を述べた。「1904（明治 37）年のルイジアナ購買博覧会に日本が参加したことで、我が国は 1893（明治 26）年シカゴ万博以降 10 年間の日本の産業発展の成果を示し、世界の他の国々と肩を並べられることを示したい。」日本の近代化を推し進める原動力になった米国への感謝を表し、「日本は通商、産業、教育、またその他の現代文明の側面において、我が国の進展の多くをアメリカ合衆国に負っています。およそ 50 年前に、わが国にコドモール・ペリー（M.C.Perry, 1794-1858）氏を派遣することで、一番最初に日本を近代的世界へと導いたのは、まさに貴国でありました。当時の日本はある西洋の作家がうまく名づけたように“the Robinson Crusoe of nation”（諸国の中のロビンソンクルーソー）でありました。」と、日米間の長年の友好関係を強調した。さらに米国と日本の現在の経済的結びつきについて、米国と年間額にして 6500 万ドルもの貿易を取り交わし、日本の国際貿易の年間総額の四分の一以上にもものぼっていることを指摘した。

セントルイス万博への参加費用は、日本はロシアとの戦争を想定し、節約を旨とし費用が少なく効果が大きくなるように工夫を凝らし、1900年のパリ万博よりはるかに少ない総額約 80 万円とした。しかし他の参同諸国よりも先に建築、出品、陳列その他一切の設備を整頓するために職員の派遣を早めたことによる出費や、日露開戦後米人其他日本に対する同情を集めるためや国際上の対面を保つために接待費がかさんだ。予算内に収める為、第五回内国勸業博覧会の展示物を再利用するなど、あらゆる手段を尽くして節約に努めた。²¹ このような日本側の努力は、他国が出品の陳列に手間取るなか、日本からの出品は万博開場前に滞りなく陳列され米国から感謝されるとともに、誠実で勤勉という日本人のイメージを形成する要因ともなった。

ロシアは日露戦争が勃発すると政府としての参加を取り消したが、美術、工芸、心芸に民間の出品が陳列された。ロシアの展示は、8 月 30 日になっても「美術館はすでに陳列が終了したが、工芸館はようやく外郭の建設がおわり、二三品の陳列に着手したが、小さいものばかりで人目をひくものはない。工芸館も外郭の建設中で何を陳列するのか判然としない。心芸館の部も今や盛んに装飾および陳列棚の設備中だが何を陳列するのかはっきりしない」²² という状態であった。

3. 日露戦争

(1) 日露戦争と米国

日露戦争は1904（明治37）年2月から1905（明治38）年8月まで、東アジアを戦場として朝鮮・満州の支配権をめぐる戦われた。1900（明治33）年に、外国勢力の排除をねらって北京を中心に中国（当時は清朝）大陸で義和団事件が起こったが、同事件の解決後もロシア軍はそのまま満州に留まりさらに南下しようとする気配も見え、日本とロシアの対立は深刻化した。日本は朝鮮半島の支配権の確保こそ自国の安全保障にとって死活問題として、ロシアの南下を阻止するために戦端を開いた。しかし、国土面積だけで日本の50倍、人口でも3倍、常備軍では5倍を誇る強大なロシアに対し、日本は西欧近代化が始まったばかりの小国であった。このようなロシアと戦い勝利をえるには、外債発行による戦費の調達と戦争の拡大を防ぐことが不可欠であった。財政的困難の中セントルイス万博に参加したのも、万博の展示物や渡米した日本人を通じて、日本の実情や考え方の理解を促し、親日的世論を形成し、米国での外債発行を成功させ、米国の好意的中立を得ようとしたからであった。

1904年当時の米国では、1861-65年の米国南北戦争の際、英国が南軍に味方したのに対しロシアが北軍を援助し、結局は勝利した北軍が主体となって統一されてきたため、一般世論がロシア敵視であった。しかも当時のロシアが、貿易上でも米国の好顧客となっていて、米国人の富豪の中には、ロシア貴族と姻戚関係を結んでいるものも少なくなかった。²³

当時欧米には、中国人や日本人が白色人種に脅威を与えるという「黄禍論」が流行していた。「黄禍論」とは、日清戦争において日本が当時の「眠れる獅子」清国を打ち負かしたことから、それに恐怖心を抱いたドイツ皇帝ウィリアム二世が、その日本の急速な国際政治への台頭と欧米諸国の勢力圏に及ぼす影響について、誇大かつ悪意をもってそれらの各国に警鐘を与えようとした主張である。ロシアやそれに加担する国が、日露戦争と黄禍論を結び付け黄色人種対白色人種、キリスト教国対異教国との戦争という説をあおることによって、欧米諸国が日本を共同敵視するおそれがあった。²⁴

米国の新聞に掲載された日露戦争の記事に、頻繁に“Yellow Peril”（黄禍）の文字が見られた。1904（明治37）年3月1日付「ニューヨーク・タイムス」に、コサック騎兵が、アムール州知事によって公式に2月5日に発せられた「黄禍の象徴である日本を鎮圧し、人類に大きく貢献することはロシアの天から与えられた義務であると宣言する。」と書かれてあった書類を手に入れたという記事が見られる。また同年3月29日付朝日新聞は、「露国新聞の強弁」として2月12日発行ノーオエ、ウレミヤ社説を掲載している。「日本は清国より露国を放逐して自らこれに変わろうとしている。日本が露人を掃討すれば公然清国保全の保護者となり、あらゆる利益を壟断すれば、欧州共通の利益という見地よりこれを忍容することはできない。日本が満州の主要貿易を掌握すれば、欧州に及ぼす危険は露国のこれを併取するより甚だしきものあらん」。ロシアの主張は、今回の戦争は、単に満州だけでなく極東全体若しくは清国の運命に関係し、欧州の利益に重大な影響を及ぼすということであった。

日本としては、人種間の戦い、宗教対立、東洋対西洋という枠組みの中で日露戦争を捕らえられることを防ぐことが重要であった。1904年3月1日付の「ニューヨーク・タイムス」は、「WHY JAPAN WENT TO WAR」と題した記事を目立つ位置に載せ、日本の高平小五郎駐米公使が*North American Review*に寄稿した「なぜ日本はロシアに対抗するのか」という論文の内容を詳細に紹介した。高平公使は「東洋へのロシアの侵略は日本にとって脅威であり、満州併合は朝鮮併合に結びつく。」と日本の行動の正当性を説明したあと、「日本は野心によって戦争をしているのではない。日本の勝利が、必ず他国への危害に及ぶという考えは根拠がない。」と、ロシアが繰り返し西洋諸国へ主張している日本脅威論を否定し、次のように西洋諸国への苛立ちを述べた。

「現代市民社会の習慣と精神に順応してきた日本国民の努力を全く評価することなく、この戦争をキリスト教とキリスト教でない者との戦争とみなす事によって、日本を非難しようとする人々に対して私は言いたい。宗教の自由は、日本では世界の国々と同様断固として保証されており、現在の戦争において、敵国の人々の行動と我が国の人々の行動により、我が国の公正な考えと行動を実証できると私は信じている。」日本に対する正確な知識での判断を望み、「人種や宗教に基づく偏った批判を除くことを期待する権利が私達にはある」と訴えた。米国の日本理解を促す舞台と期待されたのが、セントルイス万博であった。

(2) 日本の広報外交

日本政府が日本銀行副総裁高橋是清(1854-1936)を外債募集のため欧米に派遣すると同時に、当時の枢密院議長伊藤博文(1841-1909)は、日本の戦争目的広報のため貴族院議員金子堅太郎(1853-1942)を渡米させた。ハーバード大学を卒業し英語にも堪能で米国に知己も多かった金子堅太郎は、対外的にセントルイス万博の視察と米国全般における農工商業等の産業の現状についての研究を来米の目的に掲げていた。金子堅太郎は、米国に到着した直後に記者のインタビューで日本人の平和的性質の証拠として、セントルイス万博への参加を挙げて次のように述べた。「日本は未曾有の外国戦争に際しているが、日本国内、海外の日本施設は平時と変わらず、セントルイス万博における我国出品もその一例である。」従来日本が外国博覧会に出品したものよりも、遥かに品種も品数も多く出品した日本の行動と万博への参加を中止したロシアとを比較して、どちらが文明国家かと疑問を呈した。²⁵

さらに、3月19日のニューヨークでの最初の記者会見²⁶では、日本がロシアに対して止むを得ず戦端を開いたこと、日清戦争後の三国干渉から日露戦争に至るまでのロシアが東洋平和の攪乱者であったことを説明した。「ロシアを打ち負かすことは、“Yellow Peril”と称される50年間の啓蒙を無効」にし、日本が欧米にとって脅威でないことを証明するだろう。さらに、「もし日本が負ければ、目覚めつつあるアジアの希望を打ち砕く」結果となるであろう。アジアの国々は、世界の中で誇り高い文明国の一つになろうとしている日本に続こうとしているのであり、今回の戦争は、単に日本の問題ではなくアジア全体の希望でもあると、米国国民に日本の正当性を訴えた。

金子堅太郎は米国各地で演説会を行い、新聞や雑誌に寄稿するなどして、米国の支援を得るために積極的に広報活動を展開した。平和の祭典であり直接的異文化交流の場であるセントルイス万博は、日本の実情を正しく米国へ伝えると同時に米国の日本への感情を調べる最適な場所であった。金子堅太郎は何度もセントルイス万博を視察し、日本に詳細な報告書を送り、新聞記者の求めに応じて日露戦争について日本の立場を繰り返し説明した。「この戦争は長期的な流血戦争になるだろうが、日本の成功の上に、ロシア以外のキリスト教と貿易通商の成功がかかっており、極東においては、日本自体の自治権もまた同様にかかっている。」²⁷彼は、日本の勝利はロシア以外の国々への利益になることを明言した。日本政府の公式外交とは別に、さまざまな立場でセントルイス万博を訪れた日本人も広報外交の一端を担っていた。

万国学術会議に出席するためにセントルイスを訪れた法学者穂積陳重（1860-1926）は、万博のすばらしさを賞賛した後、以下のように米国に対する日本人の意見を述べた。²⁸「日本人のほとんどは、この戦争に対する米国の態度、精神的支持を大変喜んでいる。」そして、日米間の良好な関係の例を紹介した。「私の国の幼い子ども達が、毎日東京の通りでアメリカの小さな旗で遊んでいるのが見られるかもしれない。アメリカの品物は私達市民の間で人気になっており、靴・服・缶詰やセントルイスで作ったたくさんの物は、日本の貿易商の棚の上や私達の家の中ですぐに見つけることが出来るだろう。現代は日本とアメリカの人々の間は『よい感情の時代』である。」

社会主義者の立場から日露戦争を肯定したのは片山潜（1859-1933）であった。片山潜は、1904（明治37）年5月にシカゴ社会党大会に出席後、セントルイス万博内のキモノハウス（北太平洋貿易会社の事業）の付属水及びアイスクリーム店を監督しながら、近隣の市の社会党やセントルイス社会党大運動会で演説をしていた。²⁹セントルイスで新聞記者のインタビューに日露戦争について、次のように自説を述べた。「東洋での戦争はアジアの平和をもたらすと信じている。アジアは世界平和を管理する方向に向かって多くのことをする。」³⁰彼は日本人の社会主義組合を形成するために太平洋沿岸に行き、同年10月にはアムステルダムで開かれる世界社会主義大会（第2インターナショナル、アムステルダム大会）に出席した。片山潜は、この世界社会主義大会に出席する最初の東洋人であったが、日露戦争のため世界各国から注目された。彼はこの会議で露人プレカノフと握手し、社会主義の下には日露の敵国人も同胞の友であることを表明した。当時、イギリスやフランスの社会主義者の中には、日露戦争の勃発を歓迎し、抑圧的な帝政ロシア体制の崩壊の先触れと考える者も多かった。

岡倉天心（1862-1913）は、ナショナリズムの立場から日露戦争を擁護した。着物姿で登場した岡倉天心は、万国学術会議で“MODERN PROBLEMS IN PAINTING”（絵画における近代の問題）と題した講演³¹の中で、次のように主張した。「わが国の存立は、その正当な防衛線に対する大陸からの攻勢によって脅かされていた。1894年から95年にかけて、われわれは日清戦争を経験した。現在われわれは、ヨーロッパ最強の陸軍国と必死の闘争を続けている。」そして日本の勝利の原因として日本人の精神力を挙げ、「現在進行中の戦争におけるわが国民の英雄的犠牲行為の中に、古い日本の精神がまだ死んでいないことが示されている。」

日本は西洋に連なる国というイメージとともに、西洋にも東洋にもない日本独自の文化の理解も求めていた。科学的技術的な面では西洋に遅れているが、長い歴史を有する日本は精神的文化的面では勝っているという自負があった。日本の近代性と伝統を米国に示す象徴的役割を果たしたのが皇族であった。

4. 皇族の役割—近代性と伝統

(1) 皇族の外交

19世紀後半から20世紀にかけては、日本が世界の諸列強に参入しようと国力の誇示に努めた時代だった。その国力の誇示の象徴的役割を担ったのが天皇であったため、天皇は諸列強の皇帝と互換性をもつために多くの特性を急激に取り込まねばならなくなった。1871年8月に従来の和服をやめて、洋服を採用するという「内勅」が出され、ヨーロッパ諸国の国王の軍服が調査され天皇の正服と軍服が決定されるが、正服も「燕尾形ホック掛」に金ボタンつまり軍服改良形のものとして結実し、これは1872(明治5)年の行幸から採用され、やがて軍服が日常生活まで覆うことになった。³²1910年に皇族身位令により皇太子、皇太孫を含む皇族男子の陸海軍武官への任官が原則として義務づけられたが、それ以前から皇族は陸海軍の武官として活躍し「天皇の軍隊」というイメージを広める役割を担っていた。

セントルイス万博中も多くの皇族が天皇の代理として米国を訪れ、天皇と同様な軍服改良形の礼服姿と米国の人々との交流により日本の近代的イメージをアピールした。1904(明治37)年4月30日のセントルイス万博の開会式に、天皇の代理として有栖川宮夫妻が出席するという記事が、夫妻の肖像写真とともに掲載された。³³「有栖川宮は、日本の王位継承権第二位で、天皇の甥であり天皇の後見人である。彼は40歳で日本海軍の副官の地位にあり、日中戦争の英雄である。」と紹介され、有栖川宮は礼装の軍服姿で、夫人は日本の皇族の礼装である十二単の着物姿であり、日本女性の優雅で神秘的雰囲気の影響を米国人に与えた。

皇族としての最も強烈な印象を米国に残したのは、11月19日から23日の5日間に渡ってセントルイス万博を訪問した伏見宮貞愛親王(1858-1923)であった。天皇のいとこである伏見宮は、天皇に最も近い存在であり、天皇の代理としてルーズベルト大統領への親書を携えていた。彼は、日本では日露戦争の激戦の一つであった「南山」の英雄として知られていた。伏見宮のセントルイスでの日程は、万博訪問や歓迎会、催しの予定で非常に細かく設定されていた。³⁴1904(明治37)年11月19日午後1時30分すぎに、100人以上のシルクハットにフロックコートの日本人と多数の白人が参集する中、陸軍大将の御略服姿の伏見宮がセントルイスに到着し、フランシス万博総裁やセントルイス市長の出迎えを受けた。宿舎のバックinghamクラブで歓迎会に出席した後、フランシス総裁の提案を受けて、ワシントンからの困難な旅にも拘らず、3時15分に宿舎を出発し万博会場へ向かった。その夜フランシス総裁と万博役員に同伴され伏見宮と一行は、特別なボーア戦争の催しを見た。翌日は1日中バックinghamクラブの彼の部屋で過ごした。

11月21日は、午前10時にホテルを3台の馬車で出発し、製造業の宮殿の東側に到着した。日本のパビリオンと庭園を訪問し、日本のパビリオンで昼食後、工業館、製造業、教育館、心芸館、政府館の建物を訪れた。その日の最も重要な公式行事は、日本のパビリオンでのフランス総裁との夕食会であった。22日は、伏見宮は特別な祝典用の軍服を着てホテルを午前10時に出発し、博覧会会場で米国の5州の歩兵隊からなる美しいパレードを謁見した。次に輸送、機械、電気、農業館を視察し、日本のパビリオンで12時から2時まで昼食を取った後、人類学の建物を訪問し、3時から5時まではマーニング夫人の食事会に参加した。日本政府によって開かれたセントルイスクラブでの夕食会は7時30分からであった。23日も午前10時にホテルを出発し前日と同様な日程をこなした。伏見宮のセントルイスでの行動は、写真入りで連日新聞に詳細に紹介され、威厳のある軍服姿とともに文化的近代的印象を与えることに成功した。

伏見宮は、セントルイスに到着した日の歓迎会で通訳を通して米国の印象について次のように述べた。³⁵万博に関して「米国の進歩の記念碑であり大企画である」と賞賛した後、「私は20年前に米国に来たことがあるが、米国はマジックのように発展した。」と米国の進歩に驚きを表明した。そして、「米国人は世界で最も進んだ人々である。しかし日本もこの20年間美しく発展した。もし20年前の日本を知っている米国人が、もう一度日本に来たならば、日本の進歩に驚くだろう。」と、日本の近代化を強調した。また、セントルイスで評判の演劇で日本のドラマ「神の最愛の人」を観劇し、演技者と話をするなど米国人と多くの交流を通じて、親しみやすいイメージを創出していた。しかし、直接伏見宮とのインタビューを試みた記者は、東洋の伝統的皇族の姿を次のように報告している。³⁶

「伏見皇子はおそらく米国を訪れた東洋の貴族で最も先進的で国際的な人物で、多くの貴族がするように王服の後ろに隠れようとしなない。彼のあいさつは真心がこもっており、握手は強く、20年前の訪米の祭習得された型にはまった作風である。」そして彼の衣服は現代的で礼儀作法は国際的であるが、多くの点で人目を引く東洋の物腰を残していると指摘している。特に記者を驚かせたのは、米国と大きく異なるインタビューの方法であった。

伏見宮へのインタビューは、以下のようになされた。記者の名刺が皇子に渡されると、10分後に式武官が現れ、記者は応接間に通された。インタビューは、記者が質問を提出すると、式武官がその質問書を上階にいる皇子に届け、皇子から返事をもらって来る方式であった。記者は画家を同伴していたので、「皇子と直接会いたい」と訴えると、式武官は大変驚いて説明した。「伏見宮は日本の軍人として高貴な精神がある」ので、皇子に直接インタビューはできないし、「彼は日本についても、彼自身についても公の発言はできません。」と式部官は宣言した。特に重要なことは、伏見宮は「非人格的な存在」であるため、彼の言葉を新聞や雑誌に引用することはできず、「式武官が伏見宮の考えを記者に与える」ことができるだけだと説明した。記者は米国では、インタビューでの発言は直接新聞や雑誌記事に引用されるので、伏見宮の声明が直に出されなければ、それは価値がないと抗議した。しかし日本では、「例え宮が望んでいても日本政府の許可がなければ、彼は公の発言はできない。」実際彼は歓迎会に出席し、こっけいな振舞いや天気について話すが、戦争や日本のこと公の関心事について言及すると、ただちに沈

黙した。記者は自由に万博や米国で感じたことや印象、たくさんの食べ物について話した中国の Pu Lun 皇子の例を出して抗議した。式武官は、「Ru Lun は軍人ではない」と答えた。日本では、軍人にとって軍の命令がすべてであった。伏見宮は偉大な軍人であり、血の戦場で全力で戦い勝利し、軍人として彼は成功した。「また日本的観点からすると、彼は上手な話し手として成功したのである」と、記者は伏見宮に対する感想を述べた。多くの皇族がセントルイス万博を訪れ、東洋にも西洋に匹敵する文明国があることを証明しようとした。皇室の伝統がない米国では、伏見宮の言動は注目され、西洋と類似した面よりも、西洋と異質な面に興味を持たれた。しかし米国が好奇心を抱いた日本の伝統は、日本にとって西洋より「遅れた部分」ではなく、西洋に誇示する分野であった。

(2) 国威発揚と菊

ヨーロッパの菊は、一重の貧弱なものしかなかったが、19世紀後半に日本の菊が導入されてから、大輪八重のいわゆる「大菊」が大いに発達をとげ、印象派およびそれ以後の画家たちの目をひきつけ、ドガ、ルノワール、ピカソ、モンドリアンもこうした「大菊」を描いている。菊が当時の欧州で人気が高いことに注目し、日本は1900（明治33）年のパリ万博では、有望な貿易品であり国威発揚にふさわしい出品物として皇室の紋章でもある菊の出品に特に力を入れた。その結果、一株から200以上の菊花が咲いた大作菊が大賞を得ることができ、菊は日本を強く印象づける役割を果たした。³⁷

セントルイス万博では、パリ万博で大賞を得た大作菊を栽培した造園家の市川之雄が、日本庭園管理者となった。彼は日本が園芸館に展示をしなかった理由として、日本独特の花に関する知識を述べた。「日本では花の美しさだけでなく、葉の美しさでも菊を賞賛する。もし菊が美しい葉を持っていなければ、例えどんなに花が美しかったとしても、その植物を高く評価しないだろう。」まだ花が咲いていない菊の花壇について説明した。園芸館に展示されている多くの熱帯植物が思いもよらない時期に咲いている。しかし、これらの菊は、日本と気候も土壌も異なる米国でも日本の菊と同じ11月に咲かせると宣言した。「10種類の大変大きな菊と30種類の小さな菊がここにある。直系1フィートあるもっとも大きな花や、一本の木でたくさんの花を咲かせることができる。」アメリカ人が好むかどうか分からないが、新しい種類の菊も用意してある。一つの茎が平均200の花をつけ、すばらしい展示になるだろうと市川之雄は約束した。³⁸ 日本庭園では、牡丹、百合、紫陽花、菊などが植えられ、季節ごとに次々と開花するように計画され、季節感を重んじる日本人の特性が現れていた。

1904（明治37）年6月1日に政府館及び庭園の落成式が行われ、高平駐米公使が臨時博覧会事務局副総裁松平正直とともに出迎えの列の先頭に立った。主賓は大統領令嬢アリス・ルーズベルトで、200人以上の来賓には芸者によるお茶の接待もあった。市川之雄の設計による日本庭園は、配置よく造られているが樹木が少ないと評された。しかし、同年11月3日に行なわれた園遊会では、菊が満開となり招待客に感嘆の声をあげさせた。この日の朝、日本庭園で明治天皇の誕生日（天長節）を祝う厳正な儀式が行なわれ、日本人400人が出席した。国歌斉唱の

後、軍服姿の手島委員が演説し、「天皇の“limitless”の御代を祈る」ことを強く出席者に求めて終った。この天長節の様子を詳細に新聞に掲載した記者は、手島の“limitless”という言葉が奇異に思い、“limitless both as to time and prosperity”と改めて説明している。午後の園遊会には、500人の人が招待され、展示会関係者やセントルイス市の上流階級の人々も含まれていた。招待客には、くじ引きのチケットであるテープが配られ、装飾品や七宝焼きの壺などのプレゼントと引き換えられた。³⁹

これまでの万博でも日本庭園での園遊会は豪華で、エキゾチシムを満足させることで有名であり、招待客以外の人が集まった。満開の菊の中で行なわれた天長節の式典は、日露戦争の連日の戦勝により意気あがる日本帝国の象徴としての皇室と菊花が結びつき、国威発揚のイベントとなった。

5. 東洋と西洋の交流

万博に関連してセントルイスを訪れた日本人と米国人の交流の記事が、新聞紙上に多く見られた。日本の風習を紹介し、日本理解と交流を目的として開かれた「はし has-hi 或は箸の夕食会」が、次のように詳細に新聞に掲載された。⁴⁰「東洋と西洋の友情は昨夜の三時間でしっかり結びつき、地理的線は友情で消し去られた。」夕食会は万博の日本政府館の金閣パビリオンの2階の食堂で行われ、29人の新聞記者が招かれた。食事は完全なものであり、東洋風の味付けがされ上質の美食であったため、明らかに西洋の夕食より多くの点を稼いだ。ちかちか光るレインボーの着物を着た少女たちが接待にあたった。一品一品ごとに、優美な瀬戸物や漆器のお皿で出された。今夜の主役である「はし」がゲストに配られ、ゲストは彼らにとって神秘的な使い方のこつをアジア人のホストによって教わった。気配りのある日本人は、箸を使うことが出来ない人のためにナイフとフォークも用意してあった。夕食会は日本式で行なわれ、余興も欧米人が好むエキゾチックな催しが行なわれた。乾杯の後、4人の華やかな衣装を着た芸者ガールズが「寓話的なシャレード・ジェスチャー」を踊っている間、日本の女の子の音楽家が列を作って歩きながら演奏していた。茶室では、3人の女子により日本茶のしきたりに従い茶が呈された。それは招待された記者にとって、すばらしいパフォーマンスであり、ドラマチックな経験であった。

米国人も日本の文化を学ぼうとしていた。日本の博覧会委員の神埼夫妻が、セントルイスの高校のクラブで行なわれた歓迎会に出席し、日本の国花である菊の花を飾った部屋で、東洋の服装で美しく着飾った女性徒50人による日本式お茶の接待を受けたことが掲載されていた。⁴¹

庶民的レベルでの日米交流の様子は、「PIKE」の日本村を訪れたバレーガールと日本村の劇場で演技している芸者ガールが、友情を結んだという記事に見ることができる。バレーガールとは、高級住宅街に住む流行の先端に行く少女のことで、セントルイスの有名人のほとんどがすでに訪れていた日本村に興味をもち、遊びに来たのであった。この記事は、西洋の大きく膨らんだスカート姿の女性を中央に、その女性の左右に着物を着た女兒を配置した写真とともに掲

載されていた。写真はその記事の作成者によれば、「東洋と西洋の最も公正な象徴」を表しており、米国において日本女性の典型的な姿が芸者ガールであり、西洋女性の典型的な姿がバレエガールの服装であった。

日本村を訪問した最も有名な人は、やはり流行に敏感なルーズベルト大統領の令嬢であり、彼女が「PIKE」の中で唯一訪れたのが日本村であった。米国人に一番人気があった日本の展示は、エキゾチックな雰囲気のある日本村であった。その「日本村」でのバレエガールと芸者ガールとの交流は次のように示されている。バレエガールが華麗な籠がからまり、細かい部分まで装飾され絵のように美しい大きな門を通り抜けると、東京の代表的な道に入った。道の両側に並んでいる売店では、日本の市場で売っているものをほとんど買うことが出来、道の最端は日本の劇場であった。バレエガールが橋を渡ったとき、日本の色彩豊かな衣装を着た3人の小さなともかわいらしい子供達、2人は女の子で1人は男の子が劇場から歩いてきた。彼らは竹内ヨネ、コネ、シロウで、4つの劇場を持つ大きな団体の花形である。「おそらく親近感があったのか、女性の詮索好きがあったのか、バレエガールと芸者は即座に止まって、あからさまな興味を示すお互いを凝視した。」バレエガールは、「なんてかわいいレディ」とヨネが叫ぶのを聞いた。2分後バレエガールと芸者の女の子は腕を組んでいた。

バレエガールは、ぶらぶらと日本村を通り抜け、日本情緒を楽しんだ後、人力車に乗り新しい感覚を体験した。バレエガールは、日本村でゆったりとした時間を過ごすことができた。それは、「日本人は芸術的才能をもっているだけでなく、生まれつき礼儀正しさを持っていて」一度日本村の入り口を通った人々に、彼らはただの観光客ではなくてゲストであると安心させる何かを与えたからであった。「PIKE」で元気な時間を過ごした人々が、日本村の涼しい緑の美しい小さなパラダイスで目をリフレッシュさせ、疲れた骨を休める所として休憩するベンチや池に風変わりな東屋を建てていた。日本村には、「PIKE」の喧騒と対照的な静けさがあった。米国人の人々は、日本人の礼儀正しさ繊細な気配りに驚いているが、それがまさに米国人に理解して欲しい日本の文化であった。

日本人は技術的な面では西洋に遅れているが、礼儀など精神的な面では勝っていると自負していた。日本人にとっては、話しながら歩きながら物を食べる欧米人の習慣は、驚くべき無作法であった。朝日新聞の記者は、米国人の振舞いについて次のように報告している。「果物でも何でも立派なレデーが往来であるきながら、立食いするのを見かけるがこんな事は感心せぬ、日本人では十三四以下の子供がするだけだ。にちゃにちゃした物を、口中に長時間かんでいる男女は、あまりに見にくい。顔立ちがよくても若い女の立食いを見ては、日本男児悄然たらざるを得ない。」⁴²万博は、一般の人々に日本と米国の文化の相違を認識させる場となった。

朝日新聞が「日本の文明」と題した記事を1904（明治37）年7月8日に掲載した。日本は開国以来列国と交流してまだ50年である。日本人は彼らの文明を知り学び、事業に生かしてきたが、彼らはその成績の美なるを見て、日本人は模倣が上手だと言う。模倣以上のものを見ると、日本人は文明の素養があると言う。しかしその文明は欧州の文明とは根底が同じでない。「日本の宗教、日本の道徳、日本の習慣風俗、並びに日本の人種は、彼らと異同ある」を免れ

ない。彼我の混化融合は相互の一方においてこれを拒斥せざる限り決して不可能ではない。

1904（明治37）年11月11日にイギリスの有名な政治的な風刺画家が描いた日本の古い時代と新しい時代を論じた文章と風刺画が「ニューヨーク・タイムス」に掲載された。「何週間も過ぎて、私達はまだ東洋の恐ろしい戦場の修羅場を興味を持って見ている。今日の日本は幾つかの古い日本の絵画を見られるような、私達が考えていた日本と驚くべき違いがあり、戦争の技術は現代的で、かつ西洋と引けを取らないということに驚いた。ロシアの縦隊に対抗して昨晩大騎兵隊の移動を指揮した Prince Kanin（閑院宮載仁親王）の話は、穏やかに古風に馬に乗って橋を渡っている日本人男性からはほど遠い。」欧米人の中には、古い日本と新しい日本との格差に大なる戸惑いがあった。日本政府は、セントルイス万博における米国人との交流を通じて、日本と日本人の生活を理解させようとしたが、遅れた東洋という先入観を払拭することは困難であった。

一方日本政府は、セントルイス万博が日露戦争に好影響を与えたと考えていた。「政府は縦今日露開戦に至るも之を遂行することとし鋭意参同事業を進称し遂に交戦となるに及びても頓挫することなかりき。是を以て大に外人の賞賛を博し其の事業上に顕はしたる邦人の能力と平和事業に力を致すの熱心なることを以て米國を始め世界列國の同情を得、（中略）戦いは連戦連勝全世界を驚殺して國威八紘に輝くと同時に文化産業の発達を聖路易市に展示して平和事業上亦世界諸國民の賞賛を博したること実に我國の史上特筆すべき快事たりしなり」⁴³と、農商務省は後に報告している。

6. おわりに

20世紀初頭の米國は、フィリピン併合、中国に対して門戸開放を主張するなど、帝国主義的性格を強めていた。植民地政策の理論的背景となったのが、社会進化論であった。それゆえ日露戦争に内在していた人種の要因は、米國にとって極めて重要な意味をもっていた。白色人種が黄色人種に敗北することは、白人優越主義を覆すことになるからである。

セントルイス万博を訪れた外交官や皇族の広報活動は、日本が西洋國家に連なる國であり、日本が西洋の國ロシアと交戦中でさえ、「文明國」としての役割を引き受けようとしていることを表明した。それが米國の仲介による1905年のポーツマス条約に結びついたのである。

セントルイス万博は日本人の優秀さや器用さ、科学技術や法律制度に遅れをとっていても道義や礼節や教養において優れた日本人の姿を米國の人々に目の当たりに見せる効果を伴った。日露戦争におけるロシアという白人の敗北によっても、白人優越主義は修正されることはなかった。1919年に日本が提出した人種差別撤廃条項は欧米諸國によって否決された。万博での東洋と西洋の交流は、相互の知識や理解を増進したが文化の融合とは程遠いものであった。東洋が常に西洋への同化を求められたからである。

- 1 例えば、Robert W. Rydell, *All the World's a Fair. Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916*, Chicago: University of Chicago Press, pp.154-183 を参照。
- 2 吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社、1992年。
- 3 園田英弘「日本イメージの演出」1985年『図説万国博覧会史』思文閣出版 142-153頁。
- 4 佐野真由子「文化の実像と虚像—万国博覧会にみる日本紹介の歴史—」『国際関係論研究』（国際関係研究会）第9号 1995年、77-112頁。
- 5 Neil Harris「世界はるつばか—アメリカの博覧会における日本—1876年から1904年まで」『日本とアメリカ—相手国のイメージ研究—』加藤秀俊・亀井俊介編、日本学術振興会 1991年。
- 6 畑智子「セントルイス万国博覧会にみる日本の建築物」『日本建築学会計画系論文集』第532号、2000年6月、231-238頁。
- 7 農商務省『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第一編および第二編 1905年。
- 8 復刻：永山定富編『海外博覧会本邦参同史料（第5輯）』フジミ書房 1997年、54頁。
- 9 「万国博覧会のすべて」日本経済新聞編、日本経済新聞社 1966年、44頁。
- 10 前掲『海外博覧会本邦参同史料（第5輯）』、20頁。
- 11 Richard Hofstadter, *Social Darwinism in American Thought, rev.ed.*, Beacon Press, 1955. 邦訳：後藤昭次訳『アメリカの社会進化思想』研究社業書 1973年、5頁。
- 12 アメリカ古典文庫 20「社会進化論」本間長世訳、研究社 1975年、5-6頁。
- 13 Eric Breitbart, *A WORLD ON DISPLAY: Photographs from the St. Louis World's Fair*, University of New Mexico Press Albuquerque, 1997, pp.70-83 を参照。
- 14 Timothy J. Fox and Duane R. Sneddeker, *FROM the PALACES to the PIKE: Visions of the 1904 World's Fair*, Missouri Historical Society Press St. Louis, 1997, pp.184-185 を参照。
- 15 『東京朝日新聞』1904年7月26日「聖路易博覧会」並米利加印度人学校として掲載。
- 16 前掲『博覧会の政治学』199-201頁。
- 17 *WORLD'S FAIR BULLETIN*, Vol.3, No.7, May 1902, p.19.
- 18 前掲『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第二編 5-6頁。
- 19 川口仁志「セントルイス万国博覧会における日本の教育」日本比較教育学会第37回大会 2001年6月23日発表資料、1-2頁。
- 20 *WORLD'S FAIR BULLETIN*, Vol.5, No.2, December 1903, pp.20-21.
- 21 前掲『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第二編 48頁。
- 22 『東京朝日新聞』1904年10月11日に「聖路易博覧会」として掲載。
- 23 前掲「金子堅太郎と日露戦争」488-489頁。
- 24 ジャン・ピエール・レーマン「ヨーロッパ人の近代アジア観—日露戦争と黄禍論」池田清、大西仁訳『国際政治思想と対外意識』創文社 1977年、303-334頁。
- 25 松村正義「日露戦争と金子堅太郎」新有堂 1975年、22-23頁。
- 26 *THE NEW YORK TIMES*, MARCH 20, 1904.
- 27 St. Louis Public Library 所蔵、Scrapbook, Vol.12, p.122.
- 28 Ibid., Vol.12, p.125.
- 29 片山潜「米国だより」1904年『片山潜著作集第二巻』河出書房 1960年、178頁。
- 30 Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.120.
- 31 岡倉天心「絵画における近代の問題」高橋秀爾訳 1904年『岡倉天心全集第2巻』80-84頁。
- 32 「近代天皇像の展開」『岩波講座 日本通史 第17巻近代2』岩波書店 1994年、228-238頁。
- 33 Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.118.

34 *WORLD'S FAIR BULLETIN*, Vol.6, No.2, December 1904, pp.39-40.

35 Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.135.

36 Ibid., Vol.12, p.137.

37 白幡洋三郎「菊と万国博覧会」『万国博覧会の研究』吉田光邦編、思文閣出版 1986年、111-132頁。

38 *WORLD'S FAIR BULLETIN*, Vol.5, No.11, September 1904, p.31.

39 Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.131.

40 Ibid., Vol.12, p.122.

41 Ibid., Vol.12, p.114.

42『東京朝日新聞』1904(明治37)年、8月12日に「聖博雜記(三)」として掲載。

43 前掲『聖路易萬国本邦参同事業報告』第一編4-5頁。